



# Twnovelの 叛乱

---

---

秋山瑞月

---

## コントラスト

---

大きな犬をつれた小さな少年が歩いていた。リードを重たそうに引っ張り、しゃきしゃきと歩いていた。犬は気だるそうにとぼとぼと歩いていた。昼下がりのことであった。不釣り合いな少年と犬のコントラストが白昼、奇妙に思えた。ふと、涙が出そうになった。煙草を吸いきった。

## 昼の些事

---

昼ごはんはそうめんにしようかなと思っているのだけれど、わりにお腹は空いているしそうめんだけじゃ足りないかなと思って、コンビニでミニサラダを買って、そうめんを茹でながら食卓の準備をしているとミニサラダが卓の上から落ちてひっくり返り、そうめんを茹でていることを忘れた。

## 眠り

---

日々努力していようと、結果がでないことはままある。根が貧乏性に出来ている私は結果がでないことに業を煮やし、結句、それまでの努力を放棄してふて寝するのであった。寝ている時間が最も心地よい。何もせず、何も考えず、ただ惰眠を貪る自分に酔いしれ、深い深い眠りの沼に嵌まる。

## 遅刻

---

ラジオ聞いたりしてました。寝過ごしてしまったのはそのせいです。ごめんなさい。こんなことになるなんて、思ってもなかったんです。ごめんなさい。

## 熱に浮かされる

---

熱っぽい体を抱えながら、布団のなかで眠れない夜を過ごし、段々と日が上る頃になってきて、熱に浮かされていた事実に気付いた頃には、もう昼前で少し腹が減っていたが、昼食は摂らないことにして、まだまだ惰眠を貪ろうと、布団をかけ直し、くらくらしながらも枕に頭をしずめた。

## 夢

---

半ば残念がりながら僕は残ったカレーを捨てた。もう食べられない。熱っぽい体を布団に包ませ僕は眠ることにした。うつらうつらしながら僕は夢を見始めた。あの子が遠くから呼び掛けているのに足が動かない。動け、動け。僕はようやく動き始めた。しかも、逆方向に。あの子が遠ざかる。

## ソフトクリーム

---

とろけそうな暑い午後の日のなか、私は恋をし、ソフトクリームを落とした。二時間後、そこに蟻が集まったのは言うまでもない。とにかく、私は恋をした。女はふきのようにしゃんと歩いて、少し周りよりも早いペースで歩いていた。長い髪がたゆたゆと揺れていた。美しかった。

## どろどろ

---

濃い珈琲のように、甘いキャンディのように、濃厚なソフトクリームのように、僕は濃密な時間に身を任せた。素人の僕は無闇に時間の深みに嵌まろうと目を瞑った。なかなかうまくいかない。時間に嵌まると、流れが混乱し、時を忘れ、地に足のつかない心地が体験できるのであった。

午前

---

寒かったのは風のせいで、太陽は燦々と輝き、緑は新しい命を楽しみ、猫は日陰で横たわり、犬は鎖で繋がれて、僕は夢に耽っていた。甘い時間が流れる昼下がりに、歩みを早め、僕は夢を更に深めた。夢は際限がない。桃色の夢を楽しみながら、今日は何を食べようか、思案していた。

## 熱い

---

辛い拉麺だった。口のなかが灼熱地獄のごとく熱くなり、汗が吹き出してきた。その直後、汗が体を冷やし、ブルッと震えてしまった。寒い。汗だくなのにも関わらず、持ってきたジャンパーを羽織り、店を出た。空っ風が吹いて、さらに寒かった。汗が止まらない。体の中は熱かった。

## なにもしない

---

今日はなにもしなかったが、甘ったるいほど濃密な時間はどろりと流れて、やっと夕方になり、美しく光輝く夕日は溶けていくアイスクリームのように沈んでいった。砂糖たっぷりのコーヒーを静かに飲みながら、シトラスの香りのする部屋を行ったり来たりしていた。結局なにもしなかった。

## 美酒

---

軽くなったのは心だけで、体はだるくて仕方がないのだった。酒の飲みすぎはよくない。飲酒して三時間、酔いはとうの昔に消え去っていて、美しい倦怠感だけが残った。だるい。とにかく僕は、コンビニに行って、ミネラルウォーターを買うんだ、と思った。

## 空

---

煙草が吸いたかった。吸いたいのは山々なんだけれども、ここは喫煙していい場所ではないので、どうにかして煙草を吸おうと、様々な場所を探した。噴水広場、ビルの陰。コンビニの前に公衆灰皿を見つけた。いざ煙草を吸おうと箱を見てみると空だった。空を見上げた。雲ひとつなかった。

## 小銭

---

煙草を取り出そうとポケットに手を突っ込んだ。ポケットの中には小銭と、煙草の箱と、ライターと、鍵が入っていた。僕は小銭を取りだし、数え始めた。五百円玉が二枚、百円玉が三枚、十円玉が三枚、五十円玉と五円玉がなく、一円玉が五枚あった。千三百三十五円。結構ある。

## 喧嘩

---

というか、そんなこと言ってないじゃん。何だかんだでうちら三年の付き合いになるけど、何回かケンカしたけど、いつも行き違いからくるケンカじゃん。なんたっていつもあんたの彼氏を私が好きだとか、あんたのケーキを私が食べたとか、どうしたってこんなになるんだもん。

## 酒なしの酩酊

---

今日は朝から、酒を飲まなかった。随分体が楽だ。夜更けて行く今、僕は本を読みながらうつらうつらしていた。いろいろな夢がうつろいゆく。小鳥が巨大で恐ろしい夢、力士が小さくて踏み潰してしまう夢。そろそろ眠ろう。僕は布団に入り、本格的に夢を見始めた。

## 古典

---

古本屋のきな臭い、埃っぽい臭いが鼻を満たしていた。買ってきた古本は「源氏物語」「平家物語」。古典ばかりだった。古典には朝露のような貴重な雫がたっぷりである。帰り道、猫が戯れているのを目撃した。何とも平和である。付かず離れず、一定の距離を保ったまま、じゃれ合う二匹。

## UFO

---

雨が上がったのは朝早くのことで、水溜まりは鏡のように澄み渡り、青い空がそこに写っていた。傘を畳んだ私は空を見上げ、一点の曇りもない青空が広がっていた。ふと、そこに不思議な物体を見つけた。丸くて光っていて、なんとも不思議な様相を呈していた。これが私の初めてのUFO。

## 雨

---

煙草が吸いたかった。雨が降ってきたのは午後一時頃のこと、今は午後四時、段々と日も暮れていき、雨も本降りになってきていた。煙草銭がない私は急いで家に帰って、買い置きの煙草を吸おうとしていた。道すがら、雀が死んでいた。硬直した体が雨に濡れて、ぐったりとしていた。

。

## 雪

---

傘をもって出たのは正解だった。雪が降ってきたのは夕方ごろのことで、すっかり日も暮れた午後6時、僕は家に帰ることになった。仕事が一段落したので、何の気負いもなく、夜道を歩いた。降る雪を踏みしめながら、ざく、ざく、ざく、靴が汚れていくのを楽しんでいた。

## 恋

---

秀麗な眉目が私の心を動揺させた。あるいはその唇、烏の濡れ羽色のたっぷりした髪の毛、豊満な乳房だったのかもしれない。とにかく、私は恋をした。恋をしたその人に次に会ったのは一週間と二日後のことであった。彼女は髪を切っていた。相変わらず、美しかった。口紅が赤く艶めいた。

## 時間

---

椿が風で落ちた。可憐な椿の花弁はほろほろとほどけていき、長い時間をかけてバラバラになった。バラバラになった花弁は雨に流され、排水溝に落ちた。落ちた花弁はどんどん流されていき、海にたどり着いた。海では魚たちがきらめいていた。鈴の音のように広がった魚たちのきらめき。

## 発見

---

朝日が照りつけて、川面は黄金色に輝いていた。輝きは風のせいである。風が川面を波打たせ、ひとつの生き物であるかのように、流動的に波が移ろいでいた。走るのをやめて、私は自販機の前に立ち、ポケットの小銭を探った。指先に柔らかな感触があり、取り出してみると、小動物だった。

## 夏の夢

---

ラジオが蝉のように鳴っていた。暑い夏の日の午後、僕はサイダーを飲み干し、扇風機の風に当たる。空の瓶についた水滴が滴り落ちて、テーブルに水溜まりを作る。それを拭き取って、僕は夢に耽り始めた。凍てつく冬の日、暖かいマフラー、夕暮れに飲む熱い珈琲。

## 就寝前

---

煙草を吸った。美味くなかった。この雨のせいだろうか、それとも、この空の様に沈んだ色をした心象風景のせいだろうか。何れにせよ、煙草が美味くなかった。大体の仕事は終えたし、もう夜更けだ。ブランデーを一杯呷ってから、寝ることにする。足がむくんで、むず痒かった。

## 濡れた

---

思うようにはいかないものだ。新しく買った靴を卸したその日に雨に降られるとは、思ってもいなかった。にわか雨は激しく地面を鳴らす。傘も持たない私は駆け足で家に帰る。今何時？ 午後5時半。濡れた洗濯物をもう一度洗濯し、嘘のように晴れた夏の午後6時、私は珈琲をこぼした。

。

## 天気予報

---

濁った河のように時間が過ぎてゆく。何をするでもない私は、煙草を喫いながら、ぼんやり夢想到に耽っていた。今朝流れたニュースでは、連続殺人の犯人が逮捕されていた。何年後かに死刑執行だろう。その後で天気予報が流れた。今日は雨だったらしい。こんなにも空は晴れているのに

。

## ブルーベリージャムパン

---

陽がさして、空気が洗われるようだった。雨上がりの晴天に、僕はジャムパンを食べていた。ブルーベリージャムのなんとも甘ったるい感じ、それがこの天候の変化にそぐわなかった。紅茶をひと啜り、僕は立ち上がって、窓から外を眺めた。二両編成の電車がやかましく通り過ぎていく。

思っていたほど軽くはなかった。新型の生命維持装置は、小さいながらも、鉛のように重かった。年齢235歳、いくら若さを保っているとはいえ、多少の老衰が身体を蝕んだ。新型の生命維持装置はハンドバッグぐらいの大きさで、重心の定まっていない死体のように、不安定な重さを感じた。

。

## 万押し

---

捨てるつもりだったのだ。この本をどうにかして処分しようと、思案していた。燃やす、という手もあった。それほど、この本には憎しみがあつた。しかし、私は、この美しい装丁の本を燃やすのは、もったいないと思った。売るのも忍びない。私は古本屋にいて、本棚にその本を忍ばせた。

## 幻聴

---

幻聴が聞こえてきた。「刺せ」何を刺せばいいのかわからなかった。取り敢えず、自分を刺してみることにした。手頃な刃物がない。ボールペンでいいやと思って、鎖骨の下辺りをグサッとやってみた。膜を突き破る感触がして、目眩のするような恍惚が訪れた。僕は狂ってなんかいなかった。

## 狂気

---

猥雑な精神と健全な身体、それが現代に求められる一番の条件だ。水瓶の底から言葉が発せられるように、くぐもった言い方、しかし響きのある声で少年は言った。健全な身体はもう手に入れてある。あとは猥雑な精神だ。そう思った少年はその時から、狂人の真似事をし始めた。

## 血

---

夢の中で動いているように僕は動く。自分の意思ではなく、何者かに突き動かされるように。昨日は腕に切り傷をつくった。ぷくっと膨らむように湧き出てくる少し黒っぽい血が垂れて、僕は痛みを至福のものと感じ、湧き出る鮮血を舐めた。鉄とトマトジュースの味がした。

## とうしつ

---

僕は統合失調症である。時々見えるはずのないものが見えたり、聞こえるはずのない音が聞こえたり、結構楽しいものである。集中力が続きにくいというのは一つの難点だが、読書なども割合出来てそれほど困ってはいない。昨日病院に行った。お薬が増えた。少し悲しいものである。

## 晴れの日

---

今回は離婚について話そう。僕は離婚したいと思っている。どうだろう。子供もいないし、少しは気が楽じゃないか。君も少しずつズレていっていることは勘付いていただろう？ ここらで潮時だと思うんだ。明日は区役所に行こう。離婚届を貰いに。明日は晴れるらしい。

## びしょびしょ

---

雨が降ってきた。雨の匂いが周囲を満たす。古本屋帰りの私は、買ったばかりの本が濡れないようにしながら、急いで帰った。道がポツポツと雨に濡れていく。段々と本降りになってきて、傘を持っていない私は、とうとうびしょ濡れになった。本はもうダメになった。

## 存在する空白

---

古い本たちをどうにかかたそうとして、段ボール箱をたくさん注文した。届いたその日には、捨てる本と、とっておく本とが仕分けされているはずだった。しかし実際のところ、どの本にも愛着があり、捨てられなかった。折り畳まれた段ボールが部屋の片隅でじっとしている。

## 珈琲

---

公園では子供たちがキャッキヤと遊んでいた。会社では大人たちが黙々と働いていた。大学生の僕は授業をサボり、カフェで煙草を吹かしていた。珈琲を啜り、煙草の火を消した。マスターがドリップしている。ポタポタと時間の流れを表すような抽出液。珈琲を飲み干し、外に出た。

やることがない。煙草でも吸って、暇を潰そうと思う。蛍のように明滅する光。灰を落とそうとすると、火の点いた部分ごと取れた。もう一度火を点け直す。本当にやることがない。二本目の煙草を取り出そうと思ったら、もう空だった。どうしよう。とりあえずコンビニにでも行くか。

## 忘れる

---

なんてことだ。私はとうとうやらかしてしまった。こんなはずじゃなかったのに、こんなことになってしまうなんて、思ってもいなかった。トーストの焼いた側にジャムを塗るべきところを、焼いてない側にジャムを塗ってしまった。私はもう駄目だ。長年の習慣を忘れるなんて、痴呆だ。

## 天候

---

暑さは問題ではなかった。問題はこの風をどうしのぐかであった。昨日に続いて今日も風が強い。明日も風は強いのかしら。何はともあれ、今日はこのバラバラの遺骸をどう始末するかだ。今日は頭を山に埋めよう。そう決めたとき、雨が降ってきた。

あさって

---

明後日のことばかり考えて、現実を見ない子供だった。明日なにをやるという目標もない。今日なんてもってのほかだった。昨日のことは極力忘れようとした。一昨日のことはもう覚えていない。今念頭にあるのは、明後日の昼御飯。食欲だけが彼を突き動かしていた。

## 愛想

---

あなたは健康で、誠実なものだとばかり思っていました。なのにあなたは、不健康で不誠実なのだと分かりました。あの香水の臭いは何ですか。あの長い髪の毛は何ですか。頻繁に来るメールは何ですか。私はあなたが誠実な人間だとばかり思っていました。あなたはもうたくさんです。

新しい言語、それだけで嬉しい響きだった。私はフランス語を習得することにした。口の中で舌が踊るこの感覚、どこかで感じたもののように思えた。あのときした深いキスの感覚、あれに似ていた。私は当時を思いだし、そういえば最近、妻とセックスをしていないことに気がついた。

## 明日

---

流石に短編は無理だと思った。長編ならまだ、書けると思った。様々な神話が頭をよぎった。埃を被った二番煎じは、やめにしようと思った。新たなる創造。深く深く愛しすぎて、憎しみを覚えた神話たち。明日の小説を書こうと思った。誰にも開拓されていない新しい荒野へ一歩繰り出した。

新しい出来事を探そうと思った。深夜2時のことである。試しに外に出てみた。何も起こらない。ただ、自動販売機が唸っているだけである。電柱に寄りかかってみた。背中が痛いだけだった。ポケットの煙草を取り出す。火を点ける。深く煙を吸い込んで、星空を見上げた。新しさがあった。

なかったことにしたかった。ある朝僕は夢精をしていた。あるいは昨日見た夢が刺激的だったからなのだろうか。精子で汚れたパンツを洗いながら、僕はまた夢を思いだし、勃起し、パンツそっちのけでオナニーを始めた。これが村上春樹の主人公ならオナニーなどしないのだろう。

## 煙草

---

歩いていると、明日デートをする約束を思い出した。海沿いをドライブするだけの単純なデートで、彼女もそれほど期待はしていないようだった。ふと、煙草を吸いながらプロポーズすることに決めた。どんな言葉でもって彼女を口説き落とそう。タバコの吸い殻を捨てる。

## 不実

---

グロテスクなまでに醜悪な顔をした男がいた。男には妻と子供がいた。妻は美人で、子供も美しい顔をしていた。ある日、男は子供を殺した。自らのDNAが受け継がれていないと判断して。妻は平然としてそれを受け止めた。妻には不倫相手がいた。

## 檸檬

---

公園で煙草を吸っていると鳩が寄ってきた。クルッカー、クルッカー。私は火のついた煙草を鳩に投げつけた。飛び立つ鳩。新しい煙草に火をつけ、立ち上がって周りを見渡した。遊具で遊ぶ子供。砂場に盛り上がる山。全てが爆発する妄想をしながら、私は公園を後にした。